

ぎんやんにき通信

「銀屋んにき」/長崎弁で銀屋周辺の意

Topics

平和の尊さを語りかける 絵画展が開催中

長崎県美術館で2018年7月8日まで開催中の「戦没画学生慰霊美術館 無言館 祈りの絵展」。当法人は協賛スポンサーとして、この展示会を応援しています。「無言館」は長野県上田市郊外にあり、日中・太平洋戦争で命を奪われた学生たちの絵画を展示している美術館です。今回はそのうち、約140作品を展示。この機会に、画学生たちの無言の訴えに、耳を傾けられてはいかがでしょうか。



院内研究が実を結んだ 名誉ある受賞

2月に開催された、日本静脈経腸栄養学会 (JSPEN) 学術集会において、西岡心大管理栄養室長が、最高賞となる「学会賞(フェローシップ賞)」を受賞しました。

発表内容は、回復期脳卒中患者に対する栄養評価法の妥当性を検証したもので、病院勤務の管理栄養士への授与は初。名誉ある受賞となりました。授賞式は2019年2月のJSPEN学術集会で行われる予定で、副賞としてアメリカ静脈経腸栄養学会または欧州臨床栄養代謝学会での発表費用が与えられます。



病棟で指導する西岡心大管理栄養室長

秋祭りに ご協賛いただきました

恒例の秋祭りにおいて、昨年、当院周辺のお店の方々を巻き込んだご協賛企画を実施しました。各店から商品やお食事の割引券など、たくさんのご協賛をいただき、ゲームやステージイベントの参加者の皆さまへ賞品として進呈。大変好評を博しました。



ボランティアTシャツを 制作しました

開院以来、当法人は地域リハ活動に力を入れてまいりましたが、おかげさまで昨年10月、長崎市内8カ所に設置された「長崎市在宅支援リハビリセンター事業所」にも選ばれました。これを機に、ますます地域リハ活動の場を広げていきたいと考えています。そしてこれらの活動をより多くの方に認知、共感していただき、ボランティアの輪を広げていこうとボランティアTシャツを制作しました。ユニフォームを着た鳥はカラスではなく、当法人のシンボル「フェニックス」のひなです。頭にロゴマークが隠れています。



安心して
暮らせる地域へ

出島表門橋

NAGASAKI REHABILITATION HOSPITAL

基本理念

質の高いリハビリテーションサービスを集中的かつ効率よく提供することで、地域に貢献します。

専門職が徹底したチーム医療を追求し、患者さまやご家族の満足度の高い医療サービスの提供を目指します。

地域連携を推進し、急性期(救急)医療および在宅維持期を支えます。

職員が誇りと責任を持って働ける、安心できる職場環境作りを行います。

地域に開かれ、地域から支えられる存在となれるように努めます。

編集後記

今号は、前号の3人のマネジャーからバトンタッチし、6人の「チーフ」にスポットを当てました。どんな役割を担っているのか、チーフがいるからこそその当院の強みについて、少しでも知って頂けるとうれしく思います。また、「長崎まちぶら散歩」の第2弾と致しましては、昨年完成いたしました『出島表門橋』についてご紹介しております。皆さまに訪れて頂きたいおすすめスポットです。

今号の編集にあたっては、わかりやすく、それでいて医療関係者の方が読んでも違和感がないものをつくっていく、そのための調整を専門職との間で行っていくことの難しさ、また、ひとつの広報誌が、毎号多くの方のご協力のおかげで完成していることを、改めて実感しました。ありがとうございました。とても、勉強になった思い出の号となりました。(栗)

発行/一般社団法人 是真会
2018年6月 vol.13 季刊誌
企画・編集/一般社団法人 是真会 総務課
制作/(株)イースワークス

一般社団法人 是真会
長崎リハビリテーション病院
在宅支援リハビリテーションセンターぎんや
〒850-0854 長崎市銀屋町4番11号 TEL095-818-2002 FAX095-821-1187
http://www.zeshinkai.or.jp

長崎リハビリテーション病院
在宅支援リハビリテーションセンターぎんや



一般社団法人 是真会
長崎リハビリテーション病院
在宅支援リハビリテーションセンターぎんや

vol.13
2018.6



患者さま

患者さま・ご家族を取り巻く
担当者チームの各専門職が、
より専門性を発揮し、
質の高い医療サービスを
提供できることを目的として、
開院から3年後の2011年に
「チーム」が誕生しました。
チームは日々どんなことを
思いながらチームを
サポートしているのでしょうか。

専門職1人ひとりが
力を発揮できるように
チームが支えて
れています！



専門職チーム



チーム

縁の下の力持ち チーム

前例のないポジション 取り組みに対する私たちの考え方

当院では、患者さまおひとりに対し10名ほどの専門職スタッフが担当者チームを形成しています。その担当者チームをサポートするのがチームです。チームは開院から3年後の2011年に設けられた役職で、現在は看護師2名、理学療法士3名、作業療法士1名の計6名が担当。チーム一人につき1ユニット24名の患者さまを受け持っています。

そもそも「チーム」という役職・役割は、全国を見ても前例がありません。そのため、取り組みの内容やチームへの関わり方など、すべてが手探りの状態からのスタートでした。今回は、制度の開始当初からチームを務める藤本剛丈さん、チームになって3年目の中尾扶美子さんの2名にお話を伺いました。

何も無い ところからのスタート ～チーム創成期～

チーム制がスタートした試行錯誤の時期を知る藤本さん。当時の状況をこう振り返ります。

「今なら、何も無いところから新たなことを始めたとしても前向きに楽しめるかもしれませんが、7年前の私は、患者さまへの直接的な運動・練習介入無くして、1日の業務時間をどう使えば24名の患者さまの退院に向けたプログラムの進捗状況やスタッフの動きを把握できるのか、そして、どうすれば多職種を同じ目標に向か

わせることができるのか、また職種の異なるメンバーでチームという同じ役割ができるのか等々、不安ばかりでした。それでも、上司や他のチーム、各スタッフとのやりとりの中で少しずつ、チームの仕事の“型”ができてきたように思います。まだまだ今も試行錯誤中ではありますが」。

今、私が考えるチーム像

「チームに任されている大きな役割は、担当者チームの支援です。担当者チームが、患者さまの日常生活の自立を支援し、患者さまやご家族が望む生活の場へより良い状態で退院できるよう導いていくためには、チームの各専門職一人ひとりが主体的に動いていく必要があります。

そのためには、チームが一人も欠けることなく、担当者みんながそれぞれの専門性を十分に発揮できなければなりません。そこで、私から問題提起をしたり、叱咤激励したりすることもあります。

時には、先頭に立って舵取りをすることもありますが、あくまで各専門職が主役。チームは各専門職が思う存分、専門性を発揮できるよう環境を整えていく役割も担っていると考えています」。

目標に向けてチームで取り組んでいく中で重要になるのが、カンファレンスです。カンファレンスは、資格（教育課程）だけでなく、年齢や経験、育った環境まで異なる多職種で



※カンファレンス／患者さまを担当する各専門スタッフが一堂に集まり、患者さまの目標設定および退院に向けたプログラムの進捗状況を確認・修正・決定する会議



チーム歴8年
理学療法士

藤本 剛丈

Fujimoto Takenori

主体的に動ける環境を
一緒に作っていききたいですね

行います。そのため意見の相違があるのはもちろん、そもそも話している内容自体を理解し合えていないこともあります。「なんとなくしか理解できていなくても、質問や互いの確認作業が少ないと感じた時には、まず私自身が分かったつもりにならずに“なぜそう思うのか”理解できるまで聞くようにしています。そうすれば答える人も質問に答えるうちに頭の中が整理され、より深く理解できるようになりますし、聞いている人もしっかりと理解できるようになると思っています。それがそれぞれの専門性を高めることにもつながっていく事になると思っています」。

自分の考えが正しいか 日々問い続ける

日々の仕事に悩みや葛藤は付き物。前に進むために大切な“やりがい”を、どんなところに感じているのでしょうか。

「“やりがい”と言っていいかわかりませんが、いろいろな職種に口を出し、ああでもないこうでもないと思いを交わしながら、チームとして患者さまの支援に取り組んでいけるところでしょうか。

もちろん私自身、分からないことも

多く、上司への相談は欠かせませんが、自分の判断で物事が進んでいく時は、患者さまを一専門職として担当していた時と同様に“やりがい”を感じます。それと同時に、自分の考えが正しいのか、他にもっと良い方法はないのかを常に自分に問い続ける必要があるとも感じています。

私たちチーフがチーム支援のツールとして使用しているのが、患者さまの食事や排泄といった日常生活に関するシートと、各専門職の取り組みに関するシートです。私たちはこれをチームマネジメントシートと呼んでいます。このようなツールもうまく活用しながらよりきめの細かい支援を行っていきたくと思っています」。

チーフになって8年になる藤本さん。立場は変わっても患者さまに対する気持ちは変わりません。

「退院後も患者さまには、安心してその地域での生活を継続してもらいたいと思っています。そのためにも、多くの専門職で目の前のことをとにかく話し合っ、少しずつ前に進んでいきたくと思っています」。

看護師として 新たなスタート

チーフになって3年目の中尾扶美子さんは20代の頃、長崎市内や福岡市内の病院で看護師として勤務していました。結婚後、一旦仕事を離れ15年間家事と育児に専念。子どもが中学生になるタイミングで本格的に復職したのが当院でした。

回復期リハビリテーション病院での勤務は初めての経験だったのですが、復職前に長崎市役所の介護保険課で働いていた時期があり、介護保険制度についての勉強やケアマネジャーの資格を取得していました。

「初めてたずさわる職場でも躊躇

なく飛び込むことができました。ただし、一般的な病院とは違って、患者さまの1日のスケジュールは、基本的に運動練習(リハビリ)の時間を軸に組み立てられています。看護師が患者さまに対して処置をする場合は合間を見て行う必要があるので、慣れるまでは戸惑いもありました」。

看護師としてふたたび働き始め、順調にキャリアを重ねている中尾さん。大きな転機が訪れたのは、リーダーを務めていた2016年のことでした。

“気づき”の視点を 大切にしたい

「リーダーになってまだ2年目でした。チーフをやってくれないかと言われ、突然のお話にとっても驚いてしまい、どうしたらお断わりできるんでしょうかとお伝えしたほど(笑)。結局、もしダメだったら周りが判断してくれるだろう、とにかくやってみよう」と心を決めました」。

6人の中では最年長であるものの、チーフとしてのキャリアはスタートしたばかり。仕事の幅が広がったうえで、多職種のスタッフを指導する



チーム歴3年
看護師

中尾 扶美子

Nakao Fumiko

妻として母として
人生経験が力になっています

まとめ役を務めることにもなり、最初の1年は激動だったと振り返ります。

「日々共に学び、解決していく。分からないことがあれば専門職スタッフに相談し、一緒に考えて一緒に解決するようにしています」。

年齢的に子どもと同じくらいのスタッフが多いので、お昼ご飯を一緒に食べたり、体調面で気になる様子があれば声を掛けたりして、できる限りコミュニケーションを取るよう心がけています」。

担当の患者さまが入院されてから退院されるまで、役割は多岐にわたります。目指すところは同じでも、チーフによってアプローチの仕方はそれぞれです。中尾さんの場合、介護サービスやかかりつけ医の選択といった退院支援の面で、ケアマネジャーの知識が役に立っていると言います。

加えて大きな自信になっているのが、これまで積み重ねてきた人生経験です。結婚、出産、子育て、そして看取りまで、妻として母として経験してきたことが、新たなフィールドでがんばる今を支えています。

「たとえば患者さまのご自宅を訪問する際、わずかな時間でもその方の暮らしぶりに触れるだけで退院後の生活を想定できます。ピカピカに磨かれたお鍋やきれいに並べられたお皿など、細々とした部分にその方らしさが見えてくるんですよ。そういった“気づき”の視点は自分なりに広く持っているのかな、と思います」。

現在はチーフの仕事にも慣れ、自分のペースで仕事ができるようになった中尾さん。時には壁にぶつかることもあります。患者さまが回復され在宅で元気に過ごされている姿を見ることが日々の原動力に。チーム一体となって高い壁を乗り越えた過去の経験も、背中を押してくれることのひとつです。

「まだ役職もなく看護師として働いていた頃、みんなで何度も話し合いをして試行錯誤しながら目標に行き着いたチームのことは、今でもよく覚えています」。

そもそもチーム医療の現場では、知恵を出し合わなければ前に進めません。その輪の中にいられたことがとても光栄ですし、感謝しています。一人でも多くのスタッフのみなさんと一緒に、この病院だからこその経験や喜びを分かち合えればと思います」。

お姉さんのように、お母さんのようにチームを見守る温かい眼差し。長

いブランクを経てふたたび活躍するその姿は、女性がいつまでも生き生き働くための1つの選択肢を示しているようにも感じます。

「一度は現場を離れ、今また違った働き方ができていると思いますし、改めて自分は看護師としてやっていきたいと気付くこともできました」。

回復期リハ看護師の研修にも参加し、昨年1月には回復期リハ看護師の認定をいただきました。研修で学んだこともチーム支援の中で発揮できるよう、がんばっていければと思います」。

**私たちチーフが
がちりサポートします!**



さらなる進化を目指して

在宅支援リハビリテーションセンターぎんや

Interview

法人本部 地域リハビリテーション統括・在宅支援リハビリテーションセンターぎんや センター長

松坂誠應

Nobuo Matsusaka

できる限り住み慣れた地域で最期まで安心してその人らしく過ごすためには、医療と介護の連携は不可欠です。長崎リハビリテーション病院に隣接する「在宅支援リハビリテーションセンターぎんや」は4年前に開設、現在4つの事業所を展開しています。センターの取り組みや今後の展望について、松坂誠應センター長にお話を伺いました。

在宅支援の役割とセンターの取り組み

入院中、患者さまは1日に平均3時間リハビリテーション（以下、リハビリ）を行います。整った環境の中で身体機能はみるみる回復します。たとえば脳卒中を患った方の場合、体を動かした分だけ脳の機能も良くなります。

しかし退院後、階段や坂道などバリアだらけの場所に戻られた時、環境の変化に体も心も付いていけず、運動量がガクッと減ってしまう危険性も拭えません。75歳以上の高齢者は体力が落ちる速度が速く、気持ちも落ち込むことで、家の中に閉じこもってしまう傾向があります。

当センターではそういった負の連鎖を未然に防ぐため、退院後最初の3カ月を重要期間と捉え、この期間内に、障害を持った方が病院から在宅生活へ無理なく移行できるようリハビリ計画の作成や、住環境を整

えるサポートを行っています。退院が近づいてくると、ご本人やご家族のお気持ちは、嬉しさとともに退院後の生活に対する不安も半分。「心配なくて大丈夫ですよ」とお声掛けをして、実際にセンターを見学していただくと、不安も柔らぎます。

また病気による機能低下がない方でも、たとえば自宅で転倒されて、その時の恐怖心から外出を控えるなど、自ら行動を起こすことを止めてしまうケースも少なくありません。放っておくと身体機能は低下する一方です。重度化を防ぐためには、そういった方々を早期に発見し迅速に支援を行う必要があります。

日頃から身近に接しているのは、かかりつけ医の先生や地域のケアマネジャー、介護にたずさわる皆さんです。こういった方々と連携を図るとともに、リハビリの重要性をより広く伝える活動も私たちの役目だと考えます。

栄養面をサポートする新事業所を開設

当センターの特長のひとつに、言語聴覚士や歯科衛生士といった専門職の存在があります。加えて、管理栄養士が常駐する「居宅療養管理指導事業所」を開設しました。

管理栄養士は、厨房にいるものという認識が一般的だと思いますが、実はそうではありません。当病院で



まつさか のぶお
長崎大学医学部保健学科長、同大学理事、副学長を経て当法人には2016年10月着任。イギリス留学時にはチームアプローチについて研究。リハビリテーション科専門医、整形外科医、長崎大学名誉教授。

は開院当初から、病棟ごとに管理栄養士が常駐しており、医師、看護師、セラピストと同じように、医療人として働いています。入院中、寝たままの状態から車いすへ移行し、そして歩行ができるまで回復する過程では、変化に応じた食事や栄養面の管理が欠かせないからです。

今回の事業所の開設にあたっては、当センター内にも管理栄養士を配置しました。前提にあるのは、リハビリと栄養はつねに密接でなければならないという考え方です。せっかく運動をしても、偏った食事では意味がありません。管理栄養士は利用者の状態をつぶさに把握し、食事を作

る方に対して必要なカロリーや食材の大きさ、切り方まで細かく指導します。あらゆる面においてバランスの良い食事を摂ることは、効率の良いリハビリにつながるのです。

まだ始まったばかりではありますが、これからますます広めるべき取り組みだと考えています。

地域に根ざしたセンターであるために

当センターの利用者数は、4月時点で訪問リハビリ、通所リハビリ、居宅の順に211人、237人、65人でした。そして利用者の体や心の状態は常に変化しています。その変化に一人の担当者だけで対応するのは限界があります。そこで持ち寄った情報をもとに、関係スタッフと評価を重ね改善を図るといった、チームアプローチを実践しています。

センター内では毎朝約30分間のカンファレンスを、外部の介護サービス事業所等とはリハビリ会議を随時行い、利用者の情報を共有し対応を確認しています。いずれにしてもチームアプローチという輪の中心にいるのは、利用者やご家族です。

超高齢社会が急速に進む中、在宅支援の分野は、ますます社会を支える役割を担うことになるでしょう。そのため知識や技術を高める勉強や講習会への参加も欠かせません。私たちはプロだからこそ自分たちが足りない部分を自覚する必要があります。その自覚があれば足りない部分を補うために、組織の垣根を越えた関係スタッフ間での情報共有や協議ができると思います。

地域には癒す力があります。地域の中で必要とされることで、みんな元気になる。私たちも常に住民目線で地域に根ざし、開かれたセンターであり続けたいと思います。



居宅介護支援事業所 銀屋

介護サービスの相談窓口となってくれる介護の専門家「介護支援専門員（ケアマネジャー）」が常駐。要介護認定の申請代行、ケアプランの作成、利用サービスの連絡・調整などを行います。TEL.095-821-1132

通所リハビリテーション 銀屋通り

さまざまな専門職が「自分らしく自立した地域生活を続けるあなた」を支援していきます。施設内はアクティブゾーン、カルチャーゾーンなどに分かれ明るく開放的な空間です。見学についてはお気軽にご相談ください。TEL.095-818-2212

訪問リハビリテーション 銀屋

理学療法士、作業療法士、言語聴覚士といったリハビリの専門職がご自宅を訪問し、その人らしく自立した生活ができるようリハビリテーションを行います。TEL.095-821-1124

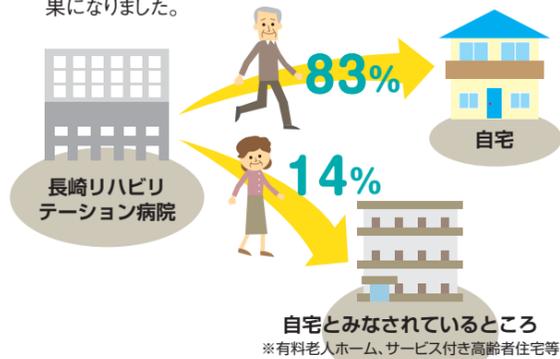
居宅療養管理指導事業所

新しい事業所として4月に開設しました。管理栄養士1名が常駐するほか、病棟常駐の4名も登録。かかりつけ医や言語聴覚士、歯科衛生士等と連携を図り、利用者の食事や栄養面に関する指導、サポートを行います。TEL.090-7385-5320

数字で見る! 長崎リハビリテーション病院

在宅復帰率

在宅復帰率は、病院から退院後に自宅や高齢者向け集合住宅等へ、生活の場を移された方の割合を示すものです。当院では、全3病棟が基準の70%を上回る結果になりました。



97%

2017年までに出生した職員の子どもの人数

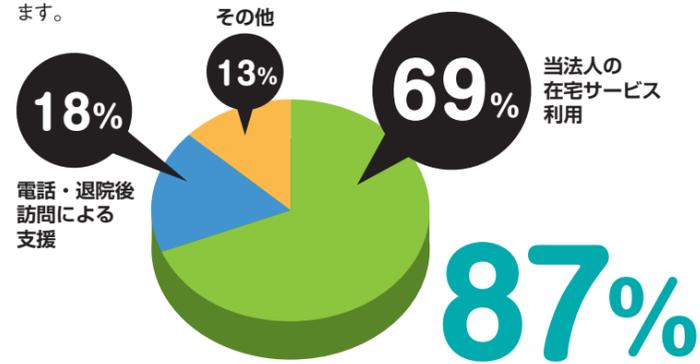
少子高齢化が社会問題になる中、子どもの誕生は嬉しいニュースですね。当院で働く職員のもとに出生した子どもの数を調べてみると、開院した2008年から2017年末までの間にこれだけの出生数がありました。当院では産休、育休制度をはじめ、院内保育園「ぎんやキッズ」を完備し、働くママやパパたちのサポートに努めています。



145名

退院後の生活支援率

退院後、体調を崩されていないか、日常生活を支援なく送られているか等、生活状況について確認し、支援が必要な時に手が差し伸べられるように努めています。



当院が開院して

10周年



2008年にリハビリテーション専門病院として開院した当院。2018年2月1日をもって10周年を迎えることができました。メモリアルイヤーとなる今年は、さまざまなイベントを企画しております。患者さま、ご家族さま、そして地域の皆さまに楽しんでいただける取り組みにご期待ください。

重症患者改善率(回復率)

入院時に重症の患者さまに対して集中的にリハビリを行ったことで、退院時に症状が改善された方の割合を示します。当院では基準の倍以上となる割合を達成しています。

64.9%



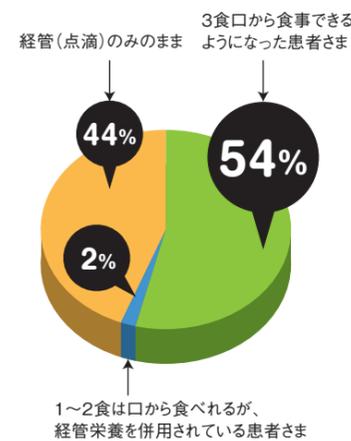
経口摂取へ移行した患者さまの割合

54%

食事を口から摂れない患者さまに対して、チューブなどを使って胃や腸に必要な栄養を直接注入することを「経管栄養」と言います。下の数字は、入院時に経管栄養を併用していた患者さまが、退院時に3食口から食事ができるようになった割合を示しています。当院では口から食べることが難しい方でも、食前・食後に口腔ケアや口腔内のマッサージを行い、また、栄養チューブは鼻から入れたままにせず、毎食ごとに口から入れるなど「口のリハビリテーション」に力を注いでいます。



経口摂取移行割合



転倒発生件数

回復期リハビリ病棟で転倒は避けられない課題ですが、少しでも減らせるよう、即日転倒ラウンドを行い、発生場所や発生時間、行動要因など原因を分析し、対策を行っています。



長崎シャチ(幸)の会

~世話人代表からメッセージ~

法人本部 地域リハ推進部
地域包括ケア推進室

松尾健吾



当会の活動を通じて地域や社会へ積極的に参加してもらいたい

私自身、1998年の暮れに脳出血を発症して、早いもので約20年の月日が経ちました。はじめは失意のどん底にありましたが、とあるきっかけで当院の理事長と出会い「長崎シャチ(幸)の会」の設立にたずさわる機会に恵まれました。

障がいを持つ方々が住み慣れた自宅や地域で暮らし、その人がその人らしく生活を続けられるためには、障がい者の障がい者による障がい者のための会が必要だと私は考えます。同じような思いを持っていらっしゃる方々にお集まりいただき、当会の活動の中で親睦を図りながら不安や悩み、情報などを共有できれば、ハンディキャップを乗り越えて地域や社会へ積極的に参加していけるのではないのでしょうか。

会は現在、10名の世話人を中心に運営し、当院の職員の皆さんにもサポーターとして参加していただいています。私自身、イベントの中で参加者の皆さんの笑顔が見られると、とても嬉しく感じます。

ゆくゆくは県内全域に支部を置くところまで活動の幅を広げられればと思います。まずは会の運営にたずさわってくださる皆さんと足並みをそろえ、ゆくり進めていくことが大切。参加者から寄せられる感想や意見、要望を今後の活動方針や企画内容に活かしていきたいと思っています。



ウォークラリー大会の様子

国指定史跡

出島和蘭商館跡

まちぶら第2弾は出島表門橋架橋のニュースで盛り上がる
国指定史跡「出島和蘭商館跡」へ。
仲良しのお2人が新しい橋を渡ってみました。



出島
長崎市出島町6番1号
開場時間/8時~21時(最終入場は閉場の20分前まで)
年中無休
入場料/一般510円 高校生200円 小・中学生100円
※障害者手帳(身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳)所持者 及び介助者1名は割引制度あり
お問合せ/出島総合案内所
TEL&FAX 095-821-7200
<http://nagasakidejima.jp/>



この橋を渡るのは
2回目なんですよ

立派な橋ですね
ワクワクします!



「長崎シャチ(幸)の会」で世話人を務める白濱詩子さん(右)と長谷川真理子さん。長谷川さんはご主人のご病気をきっかけに入会されました。



鎖国期にタイムスリップ
長崎を代表する観光スポットは
見どころたっぷり!



現代と江戸時代をつなぐ 新しい橋から見える風景とは

今回のまちぶらは、長崎シャチ(幸)の会で世話人を務められている白濱詩子さんと長谷川真理子さんに、国指定史跡「出島和蘭商館跡」を散策していただきました。会の活動を通して交流を深めたというお2人。一緒に出かけるのはこの日が初めてということでしたが、まるで古くからの親友のような仲睦まじい雰囲気です。

2017年11月25日に供用開始になった出島表門橋をさっそく渡ってみましょう。橋は長さ約38.5m、幅約

4.5m。鎖国期と同じように出島の中央部に架けられ、史跡を守るため最先端技術を用いた片持方式が採用されています。段差もなく渡りやすい構造になっていて、橋の上に立ってみると江戸時代にタイムスリップしたような気分。鉄製のシンプルなデザインも特徴的です。

ちなみに鎖国期には、出島への日本人の出入りは厳しく制限されていました。入口にあたる表門は、江戸町から渡ってくる人たちを管理する場所に当たり、一般人が出島に入る際には「門鑑」と呼ばれる通行許可証が必要だったそうです。

病気を乗り越え 輝く毎日を謳歌しています

この日、初めて橋を渡った白濱さん。2年前に脳出血を患い、当院で5ヵ月間の入院生活を送られた経験があります。「最初はショックのあまり気持ちが落ち込みました。お医者さまと私の娘が目前で話していた内容もまったく記憶にないんですよ」。

気持ちに変化が現れたのは、社会福祉士と1対1で話をした頃から。「もともと落ちるところまで落ちたら自力で這い上がる性格なんです。病室も患者主体のゆとりのあるスペースで、その中で過ごしていることを見舞客

の言葉から感じさせられました。心の変化の一助になっていったのは言うまでもなく、患者ファーストに造られた病院だと感じました。同室の皆さんが良い方ばかりだったので、毎日笑って過ごしていたのも良かったのかもしれないね。病気に負けたくないという気持ちは退院後も変わりません」。

今ではハンディキャップを感じさせないほど、元気ハツラツ。長崎シャチ(幸)の会のボランティア活動にも、積極的にたずさわってくださっています。

展示品や分かりやすい解説 出島の歴史にふれてみましょう

橋を渡り表門をくぐると、たくさんの

修学旅行生や観光客でとても賑わっていました。そんな中、白濱さんと長谷川さんのお2人は、表門の目の前に連なる、2016年に復元された建物6棟を見学しました。

それぞれの建物は十六番蔵、筆者蘭人部屋など。十六番蔵はかつての丁子蔵で、現在は企画展示室と収蔵庫に、筆者蘭人部屋は出島が貿易や文化交流を通じて世界と日本各地とつながっていた様子を分かりやすく解説しています。白濱さんと長谷川さんも、展示品や解説に興味津々。じっくり見入っていました。

1951年に始まった出島の復元整備事業は、2016年時点で第Ⅲ期まで進んでいます。これから2050年ま

で、再び海に浮かぶ出島の完成を目指しているそうです。

「地元にも、出島にはなかなか来る機会がありませんでした。橋が架かったタイミングで訪れることができ良かったです。また今度、孫と一緒に見て回りたいですね」と白濱さん。最後に表門の前で門番と一緒に記念写真をパチリ。「お茶して帰ります」と長谷川さんと2人で出島を後にしました。



また、おでかけ
しましょうね